

小林委員から聴取した主な意見

伊勢や熊野が三重県のオリジナリティであり、アイデンティティの源泉であることはまさにその通りであり、考え方として否定しないが、文化の多様性を認めることと合わせて位置づけた方がいいのではないか。

三重県にはアイデンティティの源泉としての伊勢や熊野があり、それらはこれからも大切にしていくが、三重県にはもっとさまざまな、未だ発見されていない文化があるはずであり、それらにも目を向けていくというスタンスも併記するとよいと思う。

行政の役割について、「文化活動の主体は住民であり、行政はそのための環境づくりを行う」という考え方は、今では広く共有された基本的な考え方ではあるが、これまでそのように取り組んできて、本当に文化振興が図られたのか、疑問に感じる。却って文化団体は行政に依存し、主体性をなくしてしまっているのではないか。

そもそも「文化の価値やおもしろさ」を知らないことが問題であり、行政としては、「関心のある人たちだけが活動すればいい」というスタンスから一歩踏み出し、今こそ、「文化の価値やおもしろさ」を啓発・普及する取組を行うべきではないか。

特に、普段、文化にあまり関心のない人たちに、文化のおもしろさや大切さを伝えることができるような取組を各文化施設で行うことが望ましい。

文化に関心を持ち、主体的に関わっている人たちは、行政が放っておいても活動するはずなので、個人的には、行政がアマチュアの文化団体を財政的に支援する必要はないと思っている。

文化行政を考える場合、施策の方向性2にあるように、どうしても子どもに目が向きがちである。もちろんそのような視点も重要ではあるが、やはりこれからは、高齢者に目を向けることも大事ではないか。少子高齢化が大きな政策課題となっている中で、お年寄りが充実した生を営むための「文化」を考える必要がある。

このような方針の進行管理をする際に、思いつきではなく、公共政策としての必要性をしっかりと位置づけるため、例えば三重大学と連携して、県内の文化団体や文化資源、市町の文化行政等の状況について調査することも有効ではないか。